

『冷静に 科学的に』

「ショック・ドクトリン」(ナオミ・クライン著 岩波書店)という本をご存じだろうか? 2007年に欧米で出版された(2011年、日本語訳)この本が、今また売れているらしい。本棚から引っ張り出してきて、10年ぶりに読み返している。ショック・ドクトリンとは、ひとことで言えば惨事便乗型資本主義の実践となろうか。災害などで人々がショック状態にあり、冷静さを失っている時に、平常時には通用しない残酷な市場原理主義がまかり通る。ハリケーン・カトリーナに襲われたニューオーリンズや東日本大震災に襲われた東北地方の再開発などが例としてあげられよう。

そして今まさに、この日本でショック・ドクトリンが進行しつつある。というのはレムデシビルが世界で初めて日本で承認され、臨床に用いられているからである。レムデシビルを開発したギリアド社は莫大な利益を得るだろう。「ショック・ドクトリン」を読み返した理由は、このギリアド社という会社名に見覚えがあったからだ。

「ショック・ドクトリン」の下巻第5部452頁にその名は登場する。ブッシュ(息子)政権で国防長官を務めたラムズフェルドが、かつて同社の会長を務め、タミフルの特許を有する同社の株を在任中に手放さなかった。疾病発生は国家安全保障上の問題であり、国防長官の職務に直接関係するので利益相反が発生する。実際、彼の在任中に鳥インフルエンザの脅威などで株価は9倍になり、彼は莫大な利益を得た。今回も、彼を含め、多くの株所有者が莫大な利益を得るだろう。しかし、本誌記事で明らかのように、承認の根拠となったACTT-1試験は、その質に大いに問題がある。さらに、現在進行中のアビガンをはじめ臨床試験の多くも効力判定はできない観察研究が大半である。

英国医師会雑誌(BMJ)は、その論説で、「比較のない観察研究で時間を浪費してはいけない」と警告を発したし(2020年4月21日)、英ネイチャー誌も論説で、「レムデシビルの場合は、臨床的カオスである。はじめは小規模でも仕方がないが、その後の研究は、確固としたデザインで大規模な共同研究を」と主張している(5月13日)。ACTT-1試験に対しては甘い評価の日本医師会COVID-19有識者会議でさえも、アビガンには「質の高いランダム化比較試験が必須であり、科学を軽視した判断は最終的に国民の健康にとって害悪となる」と警告を発している。本誌の一連の記事や速報版は、ショック・ドクトリンへの有効な対策となる。